

招待発表

中世日本の叙事文学における人間描写の原理と方法

——『平家物語』を素材として——

Principle and method in the description in Japanese medieval prose, as presented in the *Heike Monogatari*

Irina Lvova*

It is not man as a person who is of prime interest to the author of medieval prose; rather it is the world view, the spiritual world, and the system of complicated feudal relationships, in which man finds himself, that he describes. The method of medieval literature can be defined as a kind of conscious idealization. In other words, the author sheds light on the complicated feudal hierarchy, and describes how man should be and act. D.S. Likhachev, scholar of medieval Russian literature and member of the Academy of Sciences, has given the name “literary etiquette” to this method. According to this “literary etiquette” the lord acts in accordance with his “lordly” nature, the priest in accordance with his “priestly” nature, and the vassal and retainer behave according to the standard of vassal and retainer. All of them are valued in accordance with their rank and degree. In the same manner, women are valued in accordance with the medieval ideals of mothers, wives, and

* Irina Lvova (address: 21 Krasnoarmeyskaya St. Apt. 73 Moscow 125319)

lovers.

Most of the great heroes of the *Heike Monogatari* fit in with this view. For example, Kiyomori's eldest son Shigemori is equipped with all the noble virtues of this feudal, Confucian world view--manliness, sincerity, faithfulness, filial affection, religious devotion, respect, etc. The general vassal and warrior is often described from only one of these aspects: he can be courageous or he can sacrifice his life for his lord and represent the personification of loyalty and faithfulness. It seems that the medieval author did not take any interest at all in other aspects of their characters. The same can be said about the women. Their highest virtues are motherly love and wifely chastity.

The character of the human being in the medieval prose is static, the movements of his inner world are lacking, and mental troubles are not mentioned. Even if there is some change in the hero's mental attitude, this is always something sudden, influenced by incidental outer circumstances. It is not the result of a gradual inner development.

However, the *Heike Monogatari* is clearly different from the medieval prose of other countries. It describes the spiritual world of man in a more realistic way, it communicates the contradictory nature of his spiritual world, and it attempts to show him as the psychologically very complicated creature that he is. This is explained, in the main, by the following 2 reasons. First, the *Heike Monogatari* was written in the 13th century when the unique Heian literature with its insuperable psychological analyses of man's spiritual world already existed. Second, the

Heike Monogatari was written while the memories of the events were still fresh. All its heroes had been authentic living people, thus no fictitious characters created by the author. They were remembered at the time, as were their deeds. For this reason the character and the behaviour of the actors of the drama at times contradict the feudal morality, that is, the so-called "literary etiquette".

Other qualities of the *Heike Monogatari*, for which it deserves highest praise, are its humanism and the supreme value that it affords man. These appear especially in the objects of art, poetry, music, dance, and other human accomplishments that are lauded in the work. Without distinction of high and low, everyone has equally his own value. This is brought forth by the heroes, for example, Tomoakira in the *Tomoakira saigo* chapter and other places.

By showing sympathy and commiseration for all people who suffer and go to ruin and death, even though they are without sin and without guilt, and by harshly condemning cruelty, injustice, and craftiness, the *Heike Monogatari* is truly a democratic and humanistic work; thus, it belongs not only to the Japanese literature but constitutes an enrichment of the world literature.

さまざまな時代の文学が、人間の精神的な相貌をさまざまに描いてきたことは、いまさら申しあげるまでもありません。しかし、だからといって、ある時代の人間の描き方が、他の時代のそれと比べて、より高度であったか、なかったかを論じようとするのは誤りでしょう。現に私たちは、中世ロシ

アの大画家アンドレイ・ルブリヨフのイコンに描かれた人間が、たとえば、レンブラントの絵画に描かれた人間より、その完成度において劣るなどは考えません。これがもともと比較にならないカテゴリーであることは自明です。それとまったく同様に、文学においても、ドストエフスキーやマルセル・ブルーストの作中人物の精神世界を、たとえば、ロシアの『イーゴリ軍記』、フランスの『ローランの歌』、あるいは日本の『平家物語』など、中世文学における人間の描き方と比較したり、さらに中世叙事詩では、19世紀、20世紀の文学と比べて、人間の描かれ方がより不完全であったなどと結論するのは、根本的に誤っていると言わなければなりません。中世文学における人間の描き方は、その独自の法則にしたがひ、それ独自の方法をもっていたのです。中世文学は、その後の時代の文学がそうであったように、それなりに美しく、それなりに完成されたものであったのです。もしそうでなかったら、果してこの文学は自身の時代を超えて生きのび、幾世紀にもわたって人びとの心をあのような魅力でとらえつづけ、自国民のだけでなく、全人類の貴重な文化的遺産となることができたでしょうか。日本人の民族的英智によって創造された傑作である『平家物語』は、日本のみならず、他のいかなる国の封建時代の文学にとっても特徴的な人間描写の諸原理と方法を、みごとに総合させたすばらしい見本にほかなりません。だからといって、『平家物語』がそれなりの独自性、ユニークな民族的特質に欠けているなどということは、もちろんありません。この独自性については、のちほど触れたいと思います。

封建制度はその全盛期において、きわめて複雑な主従関係のヒエラルキーのもと、高度に発達した儀礼体系をつくりあげました。人びとの相互関係は格式、伝統、しきたり、礼法にしばられ、それらは個々の人間の世界観と思考の全体を文字どおり覆いつくす程度にまで強力であり、専制的でした。現代ロシアのすぐれた文学研究家であるソ連科学アカデミー会員ドミートリイ・リハチョフは、中世ロシア文学を論じたいくつもの注目すべき著作のなかで、社会生活に見られた格式（エチケット）重視の傾向が、芸術にも、さ

らには文学にも浸透していると指摘しています。有名なロシアのアイコンでは、聖者たちの描き方は格式にのっとり、どの聖者もがそれぞれに固有な特徴をそなえ、厳密に特定された位置とかたちで示されています。中世の仏画や仏像にもこれと同じことが見られるのではないのでしょうか。ところでアカデミー会員リハチョフは次のように書いています。「封建時代の文学と文章語に目を移すなら、そこにもわれわれは同様の格式信奉を見出すことができる。文学的格式と、それをもとに作られた文学的規範とは、中世文学における形式と内容の関係にとって、もっとも典型的で標準的なものであった」。

『平家物語』の文体の問題は、私の報告のテーマには入っていませんが、『平家物語』の文体的な多様さが、日本および外国の学者たちの注意をつねに惹きつけていたことについては一言しておきたいと思います。事実、『平家物語』においては、俗語と並んで仏教經典の格調の高い語彙が用いられたり、まったく漢文調の文章と平安朝の和文の優雅な文体が隣り合っていたり、短歌のすぐあとに、戦闘を前に武士たちが取りかわす罵言が出てきたり、坦々とした年代記ふうの叙述がふいにパセティックな感情の吐露に取って替られたり、実録ふうのそっけない文体が抒情的な風景描写と入りまじったりしています。この見かけ上の多様さこそ、中世文学に特有の特徴なのです。なぜなら、これらの文体とスタイルは、そのそれぞれが中世の筆者によってまったく意識的に、場所柄に応じて使い分けられているからです。つまり、語られている内容が宗教的なことがらであるか、軍勢の進撃であるか、あるいは物語の主人公たちの恋の悩みであるか、死を前にした哀傷であるかに応じて、文体が使い分けられているのです。中世文学においては言葉そのものまでが、アカデミー会員リハチョフが「文学的格式（エチケツト）」という術語で的確に規定したものに従えられています。

この文学的格式がさらにいっそう明瞭にあらわれているのは、人間の描写においてであり、『平家物語』に登場する数多くの人物の性格づけにおいてです。中世の作者の関心を惹いたのは、人間それ自体ではなく、一定の社会環

境、封建的なヒエラルキー関係の一階梯の代表者としての人間でした。作中人物の外貌の描写に作者がまったく無関心であり、人間の容貌の個人的な特徴を描こうとする試みがまったく見られないのは、まさにこのためです。なるほど肯定的な主人公については時として、「容儀すぐれ」といった表現が使われていますが、それだけのことで、しかもこの「容儀すぐれ」という言い方は、重盛にも維盛にも重衡にも同じように用いられるのです。女性の外貌の描写にはいくぶんか多くの注意が払われていて、これは当然のことですが、その場合でも、白い顔とか、「柳髪風に乱るる」といった伝統的な表現が用いられるか、でなければ、李夫人、楊貴妃など、中国古典文学の有名な美人との伝統的な比較がなされているだけです。そのかわり、武士の装束、甲冑、軍馬などの話になると、作者はまことに雄弁になります。ヨーロッパの英雄叙事詩も騎士たちの甲冑には大きな注意を払っていますが、この点で『平家物語』はヨーロッパの騎士たちをはるかに凌いでいます。鎧も、太刀も、馬具につける絹の房も、うるし塗りの鞍を飾る紋章のこまかな文様も、何ひとつとして作者は見落しません。ロシア最古の文献の1つである1076年のスヴァトスラフ公の『文集』に見える「もののふの美は武具なり」という言葉が、おのずと思い出されます。これは当然なことでしょう。武士の装束、武具、軍馬は、封建的なヒエラルキーの中での人間の位置を何よりもはっきりと、目に見える形で示すものだったからです。この点については、実盛が最後の合戦に赴くさいに身にまとった赤地の錦の直垂についての有名なエピソードを思い出すだけでも十分でしょう。

『平家物語』の作中人物たちの精神世界についてもこれとまったく同様に、性格描写は、その人間が特定の社会的境遇の代表者であるという側面からだけなされています。貴人は「貴人的な」資質によって、僧は「僧的な」資質によって評価され、家臣は、家臣としての行動の基準に合致しているか否かという観点から評価されるのです。女性は何よりもまず母親として、妻として、あるいは愛人として描かれます。女性に対する作者の態度を全面的に規

定しているのは、その女性が中世的な母性、婦徳、愛情の理想にどの程度まで合致しているかなのです。

中世文学にとっては、性格の変化とか、個性の漸次的な形成、発展といった概念はまったく無縁でした。人間は生まれてから死ぬまでほとんど変わらず、同じ資質の持主なのです。勇敢で高邁な人物は最後まで勇敢で高邁な人物としてとどまり、冷酷で狡猾な人間は、いつも冷酷で狡猾なのです。作中人物の精神世界に変化が起きるとすれば、それはつねに突発的、瞬間的であり、きまって偶然的な外的事情の結果として、いわば突然の内的啓示のようにして起るのです。有名な「敦盛の最後」のくだりで、熊谷直実が若武者敦盛の首を余儀なく刎ねたあと、突如発心して出家を決意するのは、その好例です。

中世文学に出てくる人物たちの性格はスタティックで不動であり、内的な動き、変化をまったく欠いていますが、『平家物語』もこの意味で例外ではありません。

中世文学の芸術方法を規定するとすれば、むろん、『平家物語』をも含めて、それは理想化の傾向をもっていたと言えるでしょう。しかし、このような規定だけで満足するわけにはいきません。文学にはさまざまな形の理想化が存在しています。中世文学の理想化は「格式(エチケツト)」に従属させられているのです。ここでは、かくあるべきものと、現にあるものが混同されています。作者は意識的にいっさいの叙述を「格式」に従わせようと努めます。作者は、これこれの状況のもとでは当然言われなければならないはずの言葉を主人公たちの口にのぼせ、これこれの事情に直面したならばかくあるのが当然といった行動を主人公たちにとらせませす。すべてを既成の基準に合わせ、日本と中国の歴史的故事と対比させ、さらに当面の事件に対する自身の態度を、仏教の法典や中国の儒教古典からの適当な引用文で裏づけようと努めるのです。中世の作者はたえず過去に前例を求め、模範や格言的な常套句に関心をもち、引用文をさがし、事件そのもの、登場人物たちの行動、思考、感情、せりふはもちろん、自身の語りの言葉をまで、既存の「格式」

の枠に合わせようとするのです。作者は高潔な貴人はどのような資質をそなえているべきかについて、確固たる考え方をもっています。そのような人物は、まず第一に、神を敬う敬虔な心の持主でなければなりません。合戦を前にした武士たちはかならず神に祈ります。心の中で祈りの言葉を念ずる場合もあれば、俱利伽羅谷の合戦を前に木曾の義仲がしたように、願書を神前に供えるときもあります。あるいは忠度の最期の場面を見てみましょう。敵方によってすでに右腕を臂のもとより打ち落されながら、忠度は死を迎える前に、最後の十念を唱えることを自分の義務と考えるのです。現代の人間の観点からすると、このくだりは信じられないくらいです。故高木市之助教授がその著作『平家物語。中世への窓』の中でこのくだりを取りあげられて、武士はその実生活においてそれほど仏教の信仰に篤かったのではあるまい、と指摘されているのは、理由のあることです。しかし、中世の物語作者の視点に立つならば、ここには意識的な作りごとは何もありません。なぜなら「文学的格式」によれば、肯定的な主人公、すなわち気品高い高貴な武人は、当然神を敬まう心もち、信心深い仏教徒にふさわしく死を迎えるべきものだったからです。

理想化された人間の描き方の代表的な例としてあげられるのは、清盛の長男である重盛の人物像です。重盛は武勇人にすぐれ、忠孝の心篤く、しかも心広い父であり、賢明公正な大臣であり、貴賤を問わず、あらゆる人に対してきびしく礼節を守る人でした。ロシアの大公の徳行の多さを鎖帷かたびらの鎖の数にたとえた、リハチョフ教授の機智に富んだ言葉がありますが、それをすこしばかり言い変えて、「やんごとなき人の徳は鎧かたがねの札しるしほどにも数多い」と言うことができるでしょう。残念なことに名前を記憶しておりませんが、さる西側の日本文学研究家が、いくぶんの皮肉をこめて、重盛のことを“a paragon of virtue”（徳の鑑）と呼んでいたことが思い出されます。しかし、ここにはアイロニーはそぐわないのではないのでしょうか。なぜなら重盛こそは中世の——この場合には儒教的な精神における——理想に完全に合致するかたちで、

意識的に理想化された為政者像であったからです。重盛の人物像には、言うならば、当時の人びとが自分たちを取りまく現実の世界には、悲しいことに、見出すことができなかつた理想的な為政者についての夢が托されています。

『平家物語』の中で重盛の夭逝が深い悲しみをこめて描かれているのは、このためです。

『平家物語』に登場する肯定的人物たち——それは何よりもまず、身分の高下を問わず武士たちですが、これらの肯定的人物の例外なくすべての者に欠かせない資質とみなすことができるのは、私心なき勇氣であり、家臣のつとめの遵守であり、死を恐れぬ覚悟です。これらの資質は数知れぬほどのさまざまなエピソードの中で物語られ、それが『平家物語』の基調をなしています。ただ、あえて申しますが、この面については『平家物語』はけっして独自性にすぐれているとは言えません。どの民族の英雄叙事詩もその主人公を恐れ知らぬ勇者として描いているからです。日本の武士たちとまったく同じように、この勇士たちも恐れを知らず、主君のために生命を捧げる覚悟をもち、死を恐れず、虜囚のはずかしめを受けるよりは、むしろ戦場で死ぬことを選びます。たとえば、『ローランの歌』の主人公であるローランは次のように言います。

「われらは身をもって主君をかばう、
主君に仕えることこそ家臣の喜び、
主君のためには酷暑も寒さも耐えしのび、
おのが血を捧げても惜しくはない…」 (1010行)

その忠実な友であるオリヴィエは答えます。

「わたしは恥をさらすよりは死を選ぶ」 (1701行)

中世ロシア文学において武将の美德は、「囚われの身となるよりは、討たれて果てん！」という言葉であらわされていました。ロシアの年代記（1254年のイパーチェフ年代記）は、ダニール・ロマーノヴィチ公が戦いを前に兵士たちに呼びかけた次のような言葉を引いています。「男が戦場に倒れたとて、

なんの不思議があろう。わが家で栄光もなく死ぬ者があるのに、この男たちは栄光につつまれて死ぬのだ。合戦にそなえて諸君の心を固め、武具を高くかかげよ！」

『平家物語』の作中人物の多くについてわれわれが知るところは、要するに彼らが勇敢で、武芸に長けた武士たちであったということに尽きます。身分の低い侍であった信連、競、僧兵であった浄妙明秀、一來法師、その他多くの者がそうですし、平家の軍勢の華とうたわれた能登の守教経、老将頼政とその子息達、さらには義経など、身分の高い武将たちについては、あらためて言うまでもないでしょう。とくに義経は、勇気と高貴な精神をもった武将のシンボルとして、後世の作家や画家が何度となく創作の対象としたものでした。

『平家物語』の主要な主人公たちが武士であり、その主要な題材が合戦であり、武士たちの人間像に中心的な役割が振りあてられ、武勇こそが彼らの性格の最大の特徴とされたのは、当然のことです。物語の肯定的な主人公である武士たちは、だれもが司馬遷の『史記』の『司馬穰苴列伝』の章に見える三つの戒律の生きた権化の観を呈しています。この戒律(『平家物語』でいう「三つの存知」)は、いくぶん言葉を変えた形で、次のように引用されています。「節刀を賜はる日家を忘れ、家を出づるとて妻子を忘れ、戦場に於て敵に闘ふ時身を忘る」(「富士川」の章)。物語の作者はこの言葉を引いてはいますが、しかし作者は、むろんのこと、その出典を明示しようなどとは考えもしません。なぜなら、過去の有名な著作から適当な引用句を借用することは、中世文学の「格式(エチケツト)」の不可分の一部であったからです。ご存じのように、この言葉はその後、真の武人の美德をそなえた武将の行動を規定する一種の座右銘のようなものとなりました。

『平家物語』の肯定的人物たちについて語る以上、たとえわずかなりとも、女性たちの人物像にふれないわけにはいきません。『平家物語』の女性たちは、だれもが美と貞節という理想的な資質の化身となっており、愛情こまや

かで貞淑そのものですが、私が第一にあげたいのは、やはり母親としての女性像です。囚われの身となるよりは死を選び、ためらうことなく自害して果てる、あの気丈な二位殿でさえ、愛する末の子重衡の助命のことになると、『物語』に語られているように、長男の宗盛に弟の生命を救ってくれと懇願しながら、「喚き叫び給」うのです。けれど、母性愛のまことの化身は、言うまでもなく、かつての後妃、建礼門院でありましょう。『平家物語』の最後の章『灌頂巻』は、全巻が母としての女院の嘆きの叙述に捧げられています。『平家物語』に建礼門院が登場するのは（状況に応じて女院の名がちらちらと挙げられている場合を除くと）、女院が母となるくだりを物語る『御産巻』と、入水した幼いわが子、安徳天皇の死を悼む最後の章『灌頂巻』の二箇所です。建礼門院こそ、日本文学における“Mater dolorosa”（歎きの聖母）そのものでありましょう。実を言うと、『平家物語』は、この慰さめられることのない悲しみのほかには、女院について何も伝えようとしますが、これ以外のことは作者の関心の外にあったのです。中世文学の理想化の方法は、建礼門院の人物像において真に感動的なたかまりにまで到達します。突飛な比較と思われるかもしれませんが、この女院の像はロシア正教会のイコンに描かれた聖母を思い出させます。ロシアのイコンの聖母も、きまって歎きの聖母として描かれており、あたかも自分の息子の悲しい運命を予見しているかのようなようです。

否定的な人物たちについても、その性格描写はきわめて典型的で、いわば肯定的人物を裏返しにしたような趣があります。肯定的な人物が大胆で、寛容で、真に高潔な武士の規範を遵守しているのに対して、否定的な人物は小心、臆病であり、礼儀を守らず、無分別な行動に走って、そうした行動が致命的な結果を招くことなど意にも介しません。この人たちは悪い家臣であり、主君としても、部下の名誉と品位をけがす悪い主君です。宗盛が源頼政の息子仲綱の馬を奪ったり、壇の浦の合戦で臆病な振舞をしたりするくだりを思い起すだけでも十分でしょう。宗盛は捕虜となっても武士にあるまじく振

舞って、周囲の非難を浴び、死の恐怖にとらわれ、なんとかして生き延びようします。肯定的な人物が寛容であり、戦いに敗れた敵を赦す度量をもっているのに対して、否定的な人物は低劣な感情に動かされます。もっとも、この低劣な資質の幅はさして広くなく、過度の名誉欲、羨望、背信、もうひとつ臆病さなどにかぎられます。彼らは裏切りさえいとわず、たとえば、『盛俊最後』の章に見られるように、たったいま寛大にも生命を助けてもらったばかりの相手に卑劣にも背後から襲いかかるというような行為をもあえてし、あるいは、梶原景時が義経に対してしたように、人をそしって破滅に追いやりたりします。否定的な人物の性格描写は、肯定的な人物の場合と同様に、中世文学の「格式」に厳格に相応するかたちでなされています。これらの否定的な人物は、多くの国、多くの民族の英雄叙事詩ですでになじみのものであり、この点で『平家物語』の独創性を認めることはやはりできないでしょう。

それでは、『平家物語』に描かれた人物像は、他の諸国民の中世文学における人間描写の原理や方法と完全に一致するのでしょうか。けっしてそんなことはありません。いや、これらの原理や方法が、すべての点についてつねに合致するとしたら、おかしなことでしょう。

個々の文学作品の独自性は、その作品が創られたときの具体的、歴史的な条件によるところが大きいものです。この独自性を大きく左右するものに、作品がそのなにかしかを必然的に受けつぐことになる歴史的な文化遺産があります。『平家物語』の場合もそのとおりで、それが創られたとき、日本文学はすでに平安朝の詩歌と散文の隆盛、中世の文学としては意外なほどに繊細な心理描写と抒情性を知っていたことを忘れられません。平安朝文学は、世界文学の発展過程における比類のない現象であって、それが日本の中世叙事文学の作者になんらかの影響を与えずにはおかなかったことは、言うまでもありません。たしかに『平家物語』の作中人物たちの性格はスタティックなものに相違ありませんが、それでもそこには、人間の精神世界をよりリアリスティックに描こうとする試みを見てとることができます。ここには人間の心

の矛盾や葛藤を示そうとする志向をはっきりと見ることができます。これは何よりもまず、平家の主である清盛の性格描写について言えることです。一方で清盛は情けを知らぬ専制君主として描かれており、『物語』も、彼のこのような冷酷さ、驕慢ぶり、極度の権勢欲が、孫、曾孫の代にいたるまでの平家一族の滅亡の唯一の原因をなしたと、はっきり断言しています。だとすれば、清盛の人物像は、中世文学の「格式」にまったくふさわしく、黒一色で塗りつぶされているのではないかと予期されるでしょう。ところがその清盛が、ならわしにそむいて、「謀反人」以仁の王の幼い息子の生命を赦し、あるいは、自分の家臣を多数斬り殺して捕虜になった侍に思いがけず慈悲をかけたりますのです。（『信連合戦』の章）。作者もこの清盛の行動をふしぎそうに、「いかが思はれけん」という言葉で解説しています。海上安全のために経島が築かれたくんだりも意味深いものがあります。島の土台に「人柱」、つまり生きてままの人間を埋めるという残酷な古来の慣習に反対するのは、ほかでもない清盛なのです。清盛の最期の場面も印象的です。仏教信者の目から見れば、これは罪深い最期ですが、同時にそれは清盛の鉄の意志と為政者としての英智をも表現ゆたかに描いています。臨終の床にありながらも、清盛は苦しみをこらえて、平家の最大の敵である源頼朝をまず討ち果たす必要を説いてやまないのです。

父と長兄の死後、平家の主となった宗盛は、全体としては否定的人物として描かれています。しかし『物語』の巻末では、自分といっしょに処刑される運命にある若い息子をいつくしむ、愛情にみちた心優しい父親として示されています。そして作者は、それまで宗盛を否定的に描いてきた筆を折りでもしたかのように、悲哀にみたされた彼の心中を深い同情の念をこめて描くのです。もっとも、注意して読みますと、宗盛の性格のこの特徴、つまり、子を思う熱い親心という特徴は、先行のいくつかのエピソードにも、短い断片的な形ではあれ、すでに認められます。そしてこれらの短いエピソードがいわば伏線になって、宗盛の父性愛が前面に押し出されて中心的なテーマと

なる巻末の諸章につながるのです(『副将被斬』、『大臣殿誅罰』)。しかしこれはすでにコンポジションの問題であり、コンポジションの問題は私の報告のテーマには入っておりません。

ここでもうひとつ例をあげたいと思います。それは通盛の死後、その妻である美人の小宰相が入水するくだりです。乳母の女房は、小宰相が近く身二つになるからだなのだから、殿の形見を生み育てることこそつとめであると説いて、自殺を思いとどまらせようとします。先にも申しましたように、『平家物語』では、母性愛こそが女性の最高の美德、ほとんど唯一無二のつとめとして称揚されています。ところが小宰相は、このような道徳律に完全に背馳した行動をとります。生まれてくる子は亡き夫に似ているであろうから、「それを見ん度毎には、昔の人のみ恋しくて、思ひの数はまさるとも、慰むことはよもあらじ」というのが彼女の言葉です。小宰相は、愛する殿がこの世にいないのであれば、母となることを望みません。小宰相はもっぱら愛人であって、母としてのつとめは眼中にないのです。彼女の名を冠した章に出てくる小宰相のモノローグは、心理描写としても精確なすばらしい傑作であり、これは近代文学のどのような作品をも飾るに値するものでしょう。平安朝文学の経験が中世日本のこの叙事文学に、まぎれもなく大きな影響を及ぼしたのです。けれど、問題はそれだけにはとどまりません。この物語に仮空の人物が出てこないことを忘れるべきではないでしょう。この作品の登場人物は、すべてが実在の人物であり、彼らは芸術的想像力の所産ではなくて、現実に生きた人たちだったのです。伝記上のいくつもの事実が存在する以上、描かれる人物が封建的モラルの完全な化身となることはさまたげられ、それらの人物の生きた実際の性格の諸特徴が保たれることになったのでした。

たとえば、源氏の当主である頼朝の性格描写は、驚くほどリアリスティックで精確なものとなっています。これは明らかに否定的な人物なのですが、にもかかわらず、最初に登場するとき、頼朝は堂々とした威厳をそなえ、「容貌優美にして言語分明なり」と述べられています。そのうえで『物語』はその

後の数々のエピソードで、彼の奸知にたけた、偽善的なところを、理不尽な冷酷さを、人道に反したいくつもの罪を描き、その根本にあったのは妬みの気持ちであり、あるいはたんなる臆病さであったことを明らかにします。これは典型的な暴君であり、『平家物語』の比喩的な表現を借りれば、敵が「暈の下より這い出でんずる」のではないか、ヨーロッパ流に言えば、「ベッドの下に謀反人を探す」タイプの小心な人物なのです。

何人かの肯定的人物も、リアリスチックに精確に、真実感をもって描かれています。維盛が都落のさい、北の方に次のように言います。「たとひわれ討たれたりと聞き給ふとも、様などかへ給ふ事は、ゆめゆめあるべからず。その故は、如何ならん人にも、見もし見えて、あの幼き子どもをも、育み給へ。情をかくべき人も、などか無くて候べき」。いったいヨーロッパの中世叙事詩のどこで、戦に赴く騎士が最愛の妻と別れるとき、こんな教訓を垂れるでしょうか。この言葉は中世のモラルに完全に背馳しているのではないのでしょうか。この言葉には、真実の人間的な愛情が、言葉のもっとも崇高な意味における真のヒューマンイズムが、文字どおりあふれています。

けれど、日本のこの中世物語のもっとも驚嘆すべき、独創的な、そして、おそらくはもっとも魅力的な特質は、それが人間におけるヒューマンリスチックな根源を賛えている点でしょう。それはわけても、言葉、詩歌、舞いなどの芸術を、人間を飾る最高のものとして、人間の真の本質の顕現として、賛美している点にあらわれています。『物語』のいくつもの章が、楽人をたたえることに捧げられています。否定的な人物である頼朝その人さえもが、自身は芸術的才能をそなえていないとはいえ、芸術の力を認め、それに当然の敬意を払っているのです。作者の熱い共感があからさまに表明されている人物、すなわち肯定的な人物は、だれもが勇ましい武人であるだけでなく、すぐれた歌人、楽人でもあります。そのほとんどが平家の公達であるのは、ご存じのとおりです。

『平家物語』の作者たちの同情が、なぜ勝者にはではなく、敗者の側に全的

に注がれているのかという問題は、学問的な文献の中でさまざまに論じられてきたところです。この同情を作者たちの階級の出身によって説明するのは素朴な試みと言わなければなりません。この説によりますと、『平家物語』は、権力を失った貴族の手で書かれたものであり、そのために彼らの同情は、古い貴族文化をわがものとし、そのことによって真の武人氣質を失った平家の人びとに寄せられている、ということになります。このようなプリミチヴナ社会学的アプローチが、すくなくとも素朴に感ぜられることは言うまでもありません。これとは反対に、きわめてミステリアスな前提に立った説もあります。この説を唱える人たちは、死への崇拜、滅び去ったもの、死にゆくものを美化する傾向が日本人には固有である、いや、日本人のみに見られることであるかのように説きます。『平家物語』では、「死の美しさ」がたたえているかのように言うのです。

みなさん。私は確信しておりますが、12世紀の日本においても、現代におけると同じように、人びとは生を愛し、死ぬことを欲してはいなかったと考えます。生命がそれ自体価値あるものだけということについては、『物語』の肯定的な人物たちの口を通して、一再ならずはっきりと言明されています。平の頼盛の忠臣である宗清は、「あはれ高きも賤しきも、人の身に命程惜しい物やは候」と述べています。このような趣旨のせりふは、このほかにもいくつも挙げることができます。

それにしても、なぜ『平家物語』の同情は、勝者の源氏ではなく、敗者の平家に寄せられているのでしょうか。なぜ中世ロシアのすぐれた叙事詩のなかで、敵にとらわれた不幸なイーゴリ公が賛えられるのでしょうか。なぜフランスの叙事詩では、戦場で討死して、部下の軍隊を滅したローランが主人公になるのでしょうか。なぜドイツの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』では、卑法にも背後から刺されてあえない最期をとげるジークフリードが中心的な主人公になっているのでしょうか。それは、ほかでもない、民族的叙事詩の共感は、きまって義経やローランのように、誠実にして勇敢でありながら、

裏切りや奸策の犠牲となって、いわれのない恥しめを受けた人たち、あるいは、平清盛の息子たちや縁者のように、他人の科のために苦しむ罪なき罪人の側に寄せられるものだからなのです。真に民衆的な創作に固有なこのヒューマンイズムの原理が、『平家物語』をも一貫してつらぬいているのです。

モスクワの中心部にある一つの広場に、ロシアの大詩人プーシキンの銅像が立っています。1880年の除幕式のときに、ドストエフスキーがあの有名な演説を行なった銅像です。その台座には、プーシキンの不滅の言葉が刻まれています。

「わたしは末長く民衆にたたえられよう、おのれの豎琴でよき思いを呼び
さましたゆえに、

倒れた者たちへの憐みを呼びかけたゆえに」

遠いロシアで19世紀の初めに書かれたこの言葉は、真に偉大な文学作品のもつ意味と精神を明らかにしています。私が見るところ、この言葉はまた、『平家物語』の不朽の美しさと栄光をもあまさず解きあかしていると思われ
ます。